

教育研究集会参加による実践的学びの 教職課程講義への接続

荒井眞一

1. 実践的学びと教職課程講義を接続するための方法

かつて筆者は、複数の大学・学科の教職課程履修学生延べ200名弱を合同教育研究全道集会(毎年11月に開催、以下合同教研と表現する)に参加させた際の実践報告・議論の経過と学生によるレポート記述をふまえ、合同教研参加の意義について述べた¹⁾。また、直近の合同教研では、教職課程講義「総合演習」受講学生に教育内容研究を行わせた後、それら研究を合同教研の場で発表させた。学生たちは、参加教員からもらったアドバイスを生かしつつ、総合演習の時間内に内容研究を踏まえた指導案を作成した。本論では、これら一連の実践の概要と経過について、事例を示しつつ述べる。

今回検討の対象とした「総合演習」受講学生は全員3年生であり、2年次講義「教育課程概論」の一環として前年度合同教研に参加した。対象学生は健康栄養学科(H大学)所属であったので、栄養教諭との連携を求められる機会が多々あると思われる家庭科教育の分科会における研究発表を念頭に入れた内容研究を行わせた。

「総合演習」講義内での事前指導では、17名の受講学生を5チームに分け、教育内容研究を行わせた。「総合演習」内ではそれら研究成果を発表させ、合同教研で発表するに足ると判断された4チームによる発表を家庭科教育分科会世話人に依頼し、ご快諾をいただいた。家庭科教育分科会で発表された学生らによる研究内容は以下のものである。

- Aチーム：北海道の郷土料理について
- Bチーム：小麦粉の性質とその利用に関する内容研究
- Cチーム：児童の成長に重要な役割を持つ栄養素 ～たんぱく質に着目して～
- Dチーム：だし汁の特徴とその利用に関する内容研究

5チーム中1チームのみ合同教研での発表を行わなかったが、これは課題設定の難解さ(糖質代謝によるエネルギーの産生に関する教育内容研究)が原因であった。このチームに対しては、内容研究を継続させ、年度末に行われる教育学会での発表を目標とさせた(現実には発表者異動のため実現せず)。

教職課程講義の一環としての研究発表であるから、その内容は後の受講学生個々の授業づくりに資するものとならねばならない。それゆえ学生たちには、発表内容とそれらに対する質疑応答内容を踏まえた指導案作成を、個別の課題として最終提出課題とした。「総合演習」における一連の経過をまとめれば、下図1のようになる。

- I. 5チームによる内容研究と講義内での2度の発表(第2, 3, 4, 5回講義)
- II. 4チームによる合同教研家庭科教育分科会での発表(第6, 7回講義を振替)
合同教研未発表1チームによる講義内研究発表(第8回講義)
- III. 4チームによる合同教研発表の総括報告(第9, 10回講義)
合同教研未発表1チームによる講義内研究発表(第10回講義)
- IV. 各学生作成指導案の第1回検討(第11, 12, 13回講義)
合同教研未発表1チームによる講義内研究発表(第14回講義)
- V. 再検討の指示を受けた学生の作成した指導案の第2回検討(第15回講義)
- VI. 指導案の完成版の作成(レポート課題)

図1:「総合演習」における授業進行

以下、本論においては上図1に示した授業進行に沿う形で、事例を示しつつ実践のありようについて明らかにする。

2. 教職課程講義「総合演習」における合同教研への参加と研究発表

合同教研での研究発表に際して、学生らに強く求めたことが2点あった。1点目は、現地調査や実験の結果を

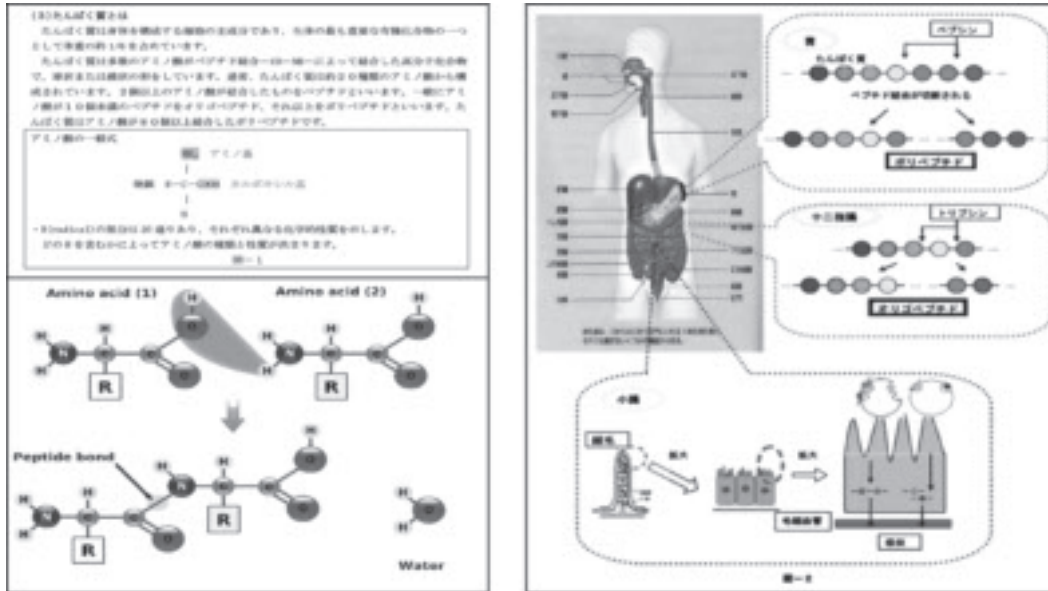


図4：Cチームによるタンパク質の結合と分解についての説明

また、だし汁の特徴とその利用に着目したDチームの発表では、だしの特徴とその効果に関して以下のような図を用いた説明がなされている。

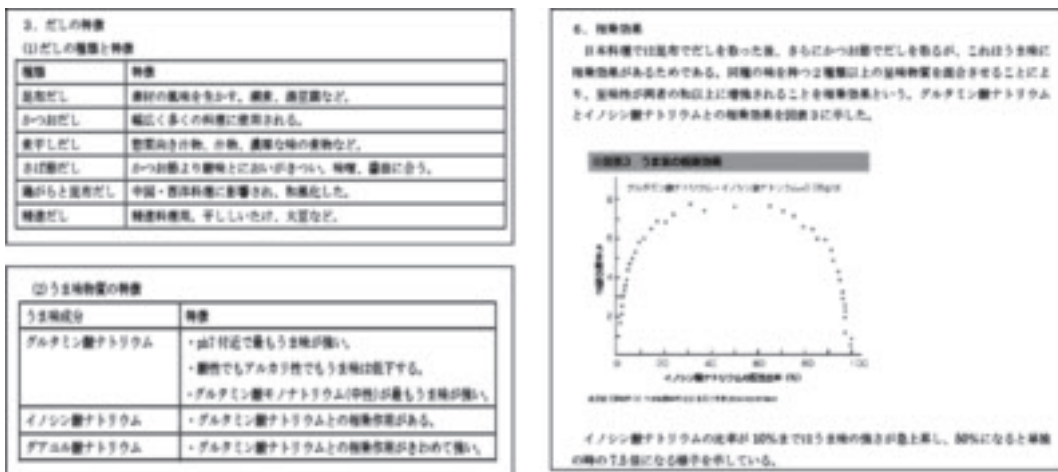


図5：Dチームによるだしの特徴とその効果についての説明

3. 実践的学びの教職課程講義への接続

3.1. 発表成果の報告と指導案作成へ向けての課題

以下、発表の場で参加教員からいただいた意見を、各チームより提出された報告資料から抜粋する。

Aチーム

北海道の郷土料理についての教育内容研究を、石狩鍋を足掛かりとして発表したAチームに対しては、以下のような意見が寄せられた。

- ・価格：地産地消と海外産の食材で作る鍋の価格を比較。給食と家庭で作る鍋の価格比較

- ・栄養素について図を用いて授業を行う：体の中で栄養素がどのような働きをするのかなどをわかり易く説明する。

わかりやすく説明する方法として、参加教員から「味噌は魚の生臭さを和らげる働きをもっているから、石狩鍋に入っている魚の臭みが消える」との意見が示された。また「家庭科の教員だけでは栄養について不足する部分があるため、栄養教諭との連携が必要」との励ましもいただいていた。

Bチーム

小麦粉の性質とその利用についての教育内容研究を発表したBチームに対しては、以下のような意見が寄せられた。

1. 実際にスポンジケーキを作り、自分たちの身のまわりの人たちに食べてもらって、口触り、美味しさなどの官能評価を行い、結果を資料に載せるとなおい研究内容だった。
2. 小麦粉と食品添加物(膨化剤)の関係を注目させる点で今回の研究内容は中学生向けのもの。小学生向けの指導案を作成する際には、小麦粉そのものに重点を置くべき。

上記1は、上図3に示した実験方法をより感覚的なものとして行うことを可能にする提案である。また、上記2は、小麦粉という食材の持つ発展的な可能性について言及されたものといえるだろう。

Cチーム

たんぱく質に着目して児童の成長に重要な役割を持つ栄養素について発表したCチームでは「私たちはたんぱく質の働きから見た必要性についての内容研究を行い発表をしたが、聞き手側には、たんぱく質を十分に摂ることが重要であると受け取られてしまった」という。このような状況を踏まえて、同チームからは「内容が専門的すぎていたので、聞き手がより理解しやすい発表にする工夫が必要であった」との反省が示された。次なる指導案作成に対しては、「専門的な内容発表をするさいには、聞き手側に興味・関心を持ってもらえるような内容にすること、全員が理解しやすい内容にすることが大切である」との方向性が述べられた。

Dチーム

だし汁の特徴とその利用についての教育内容研究を発表したDチーム報告からは、以下のような意見が寄せられた。

- ・日本料理独特の味や香りとは食材から引き出されるうま味を指し、他のものを合わせ作り出されることのできない風味をもつものだと考える。官能評価をした方がいいと言うアドバイスから、資料に頼らず、自分の舌で確かめ風味を知る方が、より自分の言葉で伝える事ができ、考察を行う事が出来ると考える。

参加教員からは「学校給食のだしの活用については、現在でも食材からだしをとり、給食を提供しているため、媒体として積極的に活用していく必要がある」とのアドバイスを受けていた。このアドバイスを踏まえ、同チームから指導案作成へ向けて、以下のような方向性が示された。

子ども達の指導方法は、実際にだしを作り子ども達に味を体験してもらい、家庭科などの教科と関連づけることによって、だし汁のとり方や本来の味を理解することができるかと考える。

3.2. 発表成果の報告を踏まえた指導案の作成

下図6の左には、郷土料理についての内容研究を行ったAチームの一学生による指導案を示した。この学生は指導案に付した考察レポートの中で「視点を広く持つことで、幅広い角度から食育を行う事が出来るという可能性に気付いた」と述べている。このような気付きは、本州と北海道との交易やみその歴史に着目した展開部分で具体

題名：Cチーム：たんぱく質の働きを知らう					題名：Dチーム：だしと旨味について				
指導者名	Cチーム	指導者名	Dチーム	指導者名	Dチーム	指導者名	Dチーム	指導者名	Dチーム
題名	たんぱく質の働きを知らう				だしと旨味について				
本授業のテーマ	たんぱく質の働きを知らう				だしと旨味について				
本授業の目標	たんぱく質の働きを知らう				だしと旨味について				
学習事項	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう
学習の活動	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう
学習の活動	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう
指導案	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう	たんぱく質の働きを知らう

図7：Cチーム、Dチームの学生より提出された指導案

4. 実践の成果と今後の課題

以上本論では、教職課程講義「総合演習」における合同教育研究会からの学びの概要について述べた。教育実習を行う4年次を前にした3年次後期に現職教員から直接的なアドバイスをいただいたうえで指導案作成を行わせることができたという点において、研究会の場における研究発表は意義あるものであったと思われる。しかし、周知のとおり「総合演習」は昨年度をもって教職課程講義からは姿を消している。それゆえ、研究会を学びの場とする取り組みは異なった方法で行われなければならない。

2012年度より筆者は札幌大谷大学社会学部地域社会学科に異動し、教職課程を担当することとなった。この学科では教職課程における学びを重視しており、自主的なゼミ活動のもと、オープンキャンパスのような学内行事の中で新入学生が模擬授業等を行っている。今後はこの自主的なゼミ活動の場を主たる足場としつつ、学内行事での模擬授業、教育研究会や北海道地域における教育学会等での研究発表を、4年間にわたる学生生活の中で行わせる予定である²⁾。

教職課程講義においては、これら実践的な学びの成果と講義内容との関連性を学生に意識させながら、各時期における自己の学びをとらえさせたい。教育実習にそれら学びの成果が発揮された後、次なる課題が履修カルテという形で客観化され、教職実践演習でそれら課題解決へ向けての試みがなされるならば、4年間にわたる教職課程を一貫性のあるものとして実行しようとする。それゆえ、教職課程担当者として今後の目標となることは、確実な成果を学生生活全体の中で積み重ねていくことが可能となる実践的な学びのカリキュラムづくりである。今後も実践の成果や連続性を問う試みを継続しながら、目標の達成に近づきたい。

注

- 1) 「教育研究会参加による実践的学びの実現を目指した教員養成系大学における授業実践」、『愛知教育大学研究報告』第60輯, 2011, pp.82-9。
- 2) 2012年度オープンキャンパスにおける模擬授業(全4回)の概要は、『地域を学びの場とした教職実践のあゆみ』第1号という小冊子(札幌大谷大学社会学部地域社会学科発行, 編集は筆者の手による)としてまとめられている。